

水野 哲雄（日本史学）

日本中世における武家儀礼と大名領国

本論文は、中世後期日本の中央である京都から島津氏領国に対して武家故実が伝播する過程と、受容した故実を踏まえて大名領国で催される儀礼の実態の検討を通じて、中世武家社会の儀礼的秩序の構造について考察を加えたものである。

第一章では、戦国期における室町幕府の故実家京都小笠原氏の動向について総合的に検討を加え、十六世紀初頭の幕府の政治的混乱から距離を置いた小笠原備前守家は、他の一族庶家と異なり、京都に存在基盤を持ち続けたことを明らかにした。この戦国期の京都小笠原氏は、まさに近世の家元的な存在であり、そこに近世以降の芸能との連続性を見出した。

第二章では、室町・戦国期の中央から島津氏領国に対する弓馬故実の伝播の実態について、伝存する故実書を素材として検討を加え、島津氏領国の武家故実家としての川上氏・新納氏・喜入氏の実態について究明した。さらに、これら三氏は、いずれも戦国期までに京都小笠原氏と交渉を持ち、同氏が体系化した弓馬故実の影響を受けているという点で共通していることを明らかにした。

第三章では、戦国期から織豊期にかけて、伊勢流故実が島津氏領国へ伝播する過程について検討を加え、十六世紀末に島津氏領国の人々、特に有川氏が伊勢流故実を体系的に受容した状況を明確にした。また上井覚兼を初めとする戦国期島津氏配下の武士たちが肯定的な芸能観や多芸主義的志向を共有したこと、またその背景の一端には伊勢流故実が存在したことを明らかにした。

第四章では、戦国期における島津氏正月儀礼について検討を加え、大名領国における儀礼的秩序の構造を提示した。惣領家を退けて大名となった島津氏伊作家は、自身の正統性や奥州家以来の支配の連続性を主張するための手段として正月儀礼を利用したことを明らかにした。

第五章では、島津氏の自己認識を反映する氏姓に着目し、十二世紀末以来島津氏が使用した三つの姓（惟宗・藤原・源）について、その使用の契機や背景について検討した。藤原姓については、荘園領主（摂関家近衛家）との族的連帯を主張したものであり、戦国期に島津氏伊作家が、自己の正統性を主張するために近衛家との擬制的同族関係を再確認し、藤原姓を利用したこと、室町期における源氏由緒形成の背景には、室町將軍を中心とする武家社会の儀礼的秩序が存在したことを明らかにした。

以上の検討を通して、中世後期の中央と大名領国とを包含する、統一かつ重層的な武家社会の儀礼的秩序の構造が明らかにされ、この様な中世武家社会の伝統的秩序の存在は、戦国期の大名権力が領国統治を円滑に進める上でも極めて重要な要素であったことが明確になった。

以上のような観点から、本調査委員会は、本論文の提出者が、博士（文学）の学位を授与されるに十分な能力を持つものであることを認めるものである。